

『説文解字繫伝』反切校勘記（3） - 内的再構による -

著者	東ヶ崎 祐一
雑誌名	東北大学言語学論集
号	24
ページ	69-93
発行年	2016-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130456

『説文解字繫伝』反切校勘記 (3) —内的再構による—

東ヶ崎 祐一

キーワード：『説文解字繫伝』、反切、校勘、内的再構

はじめに

本稿は「『説文解字繫伝』反切校勘記 (1) 一三本異同考・上一」(東ヶ崎 2008)、および「『説文解字繫伝』反切校勘記 (2) 一三本異同考・下一」(東ヶ崎 2009) の続編である。底本・形式・凡例その他については (1) と同一であるので、参照されたい。

ただし、本稿は (2) ままでと違い、祁寯藻刻本、汪啓淑刻本、述古堂蔵本の3種類の伝本に異同がないものの、誤りがあると考えられる反切を取り上げ、「内的再構」などの方法を用いて本来の形を探る試みである。具体的には、次のような方法を使うことになる。

まず、同一音の反切からの類推という方法がある。すなわち、繫伝反切では同一音を表すのに1～数種類の反切が使われているが、全体としては同一音の字に同一反切を用いる傾向がある。また同一音を表すのに複数の反切が存在しても、その場合多くが、多数に使われる有力なもの1つとそうでないものとに別れる。このため、反切に誤りがあるとみられるものは、同一音を持つ他の字の反切をみることによって、どの部分に誤りがあるか推測することが可能なのである。

以上の方法が有効なのは同音字が多数存在する場合であり、1音節につき1字しかないものや、複数字があってもそれぞれの反切が異なるため有力なものを見出せない場合、また有力でない反切に誤りとみられる箇所が存在する場合、この方法は適用できない。この場合「類似の字の誤写を推定」することになる。ただしこれは類似の字を判定する基準がはっきりしないことが多く、復元の精度は類推からの推測の場合よりも落ちる。

さらに、少数ではあるが、誤写の理由がはっきりせず、本来の形を推測し難い反切も存在する。そのような場合「不明」として後考を待つこととする。

校 勘

1-6b-1 祖 作靚切

「祖」は『広韻』では「則古切 (姥韻精母)」である。

反切校勘記 (1) の「三」の項で言及したように (東ヶ崎 2008, p. 113, 注 5)、同音字「琚」「蒞」の反切が「作靚反」であること、および大徐本の反切が「則古切」で繫伝反切と一致しないことからすると、「切」は「反」の誤りであり、本来の反切は「作靚反」であると考えられる。

1-11a-3 珣 許丈反

「珣」は『広韻』で「許亮切 (漾韻開口曉母)」または「式亮切 (漾韻開口書母)」。

対し「丈」は「直兩切 (養韻開口澄母)」であり、声調を異にする。同音の「晷」が繫伝反切で「許仗反」に作ることから考えると、本来はこれも「許仗反」であったと推測できる。

ただし、漾韻開口曉母字の反切については「許丈反」が3例 (向・珣・闕) に対して「許仗反」が1例であること、更に「晷」「仗」とともに上去両音をもつ字である¹ことからすると、果たして3例すべてを誤りとして処理してよいものか、いwasかためられる。

あるいは「丈」が「濁上変去」を起こして去声音として読まれる場合もあったことを示すものか²。ただし「丈」は「許丈反」以外はすべて上声字の反切下字として用いられる³。

1-12b-2 琬 于卷反

「琬」は『広韻』で「於阮切 (阮韻合口影母)」または「烏貫切 (換韻合口影母)」である。反切上字の「于」は云母であるため、声母が一致しない。

反切上字については「於」の誤りと見なせる可能性がある。すなわち繫伝反切では、本来「於」であるべき箇所が「于」となっている例が多数現れ、これらは文中の「於」を伝写の段階で「于」に書き換えたことによる誤りであるとみられる (東ヶ崎 2008, p. 133, 「霽」の項参照) が、これもその1つである、と見るのである。ただ、それらはほとんどが卷十三以降に現れるものであり、卷一には1例も現れない。まして、「于卷反」を「於卷反」に作る異本もない状態では、「于」が「於」の誤りだとは処理するのはためられる。

更に反切下字の「卷」も、『広韻』に「巨員切 (仙韻合口三等群母)」「求晚切 (阮韻合口群母)」「居轉切 (彌韻合口見母)」「居倦切 (線韻合口見母)」の四音を載せる多音字である。『広韻』や大徐本、『篆韻譜』では「卷」が線韻合口の反切下字に用いられることからすると、繫伝反切でも線韻に用いられることが期待されるが、実際に反切下字に使われる例をみると、「登：俱卷反」の例があるのみであり、しかもこれは反切下字と帰字が同音で反切の体を成していない⁴。つまり「俱卷反」も何らかの誤りを含む反切であり (後述)、参考にならない。

以上、「琬」の本来の反切がどのようなものであるか、今のところは不明と言うべき段階であり、後考を待つ他にない。なお反切上字については「迂」の誤りである可能性もある。

1-14b-6 璫 魯虺反

「璫」は『広韻』には「力追切 (脂韻合口来母)」「魯回切 (灰韻来母)」「力遂切 (至韻合口来母)」の3音を載せる。これに対し「虺」には皆韻・灰韻・尾韻の音があり、この反切に

¹ 晷：「許兩切 (上声養韻開口曉母)」、「許亮切 (去声漾韻開口曉母)」、仗：「直兩切 (上声養韻開口澄母)」、「直亮切 (去声漾韻開口澄母)」。

² 「濁上変去」を反映している可能性がある字音に「朕」がある。「朕」は『広韻』で「直稔切 (寢韻澄母)」だが、繫伝反切は「直質反 (沁韻澄母)」、また反切下字としても「侵菱：七朕反 (寢韻清母)」「甚：神朕反 (寢韻常母だが沁韻常母の可能性もあり)」に対して「矜：極朕反 (沁韻三等群母)」と、上声・去声両方に用いられている。「朕」に去声音があった痕跡はなく、特殊な読音を仮定しない限り、この現象を説明するには「朕」に「濁上変去」が起こっていたと考える以外にはない。

ただし「濁上変去」の可能性を考えられるのは、「朕」の他にはここで問題にした「丈」のみであり、広汎に起こったはずの音韻現象にしてはあまりに例が少ない。これらの例が本当に「濁上変去」を反映しているのだとしても、まだ個別の変異の段階だったのであろう。

³ 「敝：赤丈反 (養韻開口昌母)」、「錄：式丈反 (養韻開口書母)」。

⁴ 「登」の音は「求晚切 (阮韻合口群母)」「居倦切 (線韻合口見母)」であり、いずれの音が反切に採用されたものであれ、「卷」と同一の音が存在することになる。

においては「𪛗」の灰韻音を利用したものと考えられる。

ところが、この他に「𪛗」を用いた反切を見ると、尾韻合口云母に「于𪛗反」が3例現れる(葦など)。璫には尾韻あるいは他の止攝上声相当の音はないため、「魯𪛗反」が止攝上声合口来母の音を表しているとは考えにくい。これについては、「沈」「任」などの反切下字が、場合によって違う音を示しているとした考えられない例があるため⁵、「𪛗」もそれらと同様に、例外的に反切ごとに下字の音の不一致があるものとみなすべきであろう。

1-16b-5 璫 久晉反

「璫」は『広韻』では「徐刃切(震韻邪母)」。⁶これに対し「久」は見母であり、声母が合わない。

同音の「藎」「𪛗」の反切が「夕晉反」であることからすると、「久」は「夕」の誤りであり、本来の反切は「夕晉反」であると考えられる。

1-17b-4 玳 母𪛗反

反切下字の「𪛗」は諸書に見えない。おそらく何らかの誤字であると考えられる。

「玳」(『広韻』莫杯切、灰韻明母)と同韻の文字で𪛗に類似する文字としては「𪛗(灰韻見母、『広韻』公回切、魂の異体字)」がある。「𪛗」は繫伝反切では「回」の反切下字としても用いられている(戸𪛗反)ことを考えると「母𪛗反」も本来は「母𪛗反」であった可能性が十分あるだろう。張世祿(1944)も明示はしていないが、「𪛗」を「𪛗」とみているようである⁶。

1-17b-6 璣 凡離反

「璣」は『広韻』では「居依切(微韻開口見母)」。⁷これに対し「凡」は奉母であり、声母が合わない。

「凡」は字形の酷似する「凡」の誤りとみなせる。ただし、音の通じる止攝平声開口三等見母の反切を見るに、「凡離反」という反切が支韻開口三等見母(「𪛗(羈)」「𪛗」)および脂韻開口三等見母(「𪛗」)に用いられている。これと、「凡」の異体字に「凡」があることを考え合わせると、「璣」の反切も本来は「凡離反」だったものが、伝写の過程で「凡離反>凡離反」となった可能性も考えられる。

1-19b-5 壻 泉意反

「壻」は『広韻』では「蘇計切(霽韻開口)」。⁸これに対し「意」は志韻であり、韻母が合わない。同音字の「涵」の反切が「息惠反」であり、「意」と「惠」に字画の類似するところ

⁵ 「沈」の例:「止沈反(斟など、侵韻章母)」に対し、「而沈反(稔など、寢韻日母)」「九沈反(錦、寢韻三等見母)」「九沈反(乙沈反の誤りか、飲(飲)、寢韻三等影母)」。

「任」の例:「昔任反(心、侵韻心母)」「巨任反(禽など、侵韻三等群母)」に対し、「七任反(沁、沁韻清母)」「衣任反(蔭、沁韻三等影母)」。

それぞれ、「沈」の「直深切(侵韻章母)」と「式荏切(寢韻書母)」、「任」の「如林切(侵韻日母)」と「汝鳩切(沁韻三日母)」の音を踏まえている。

⁶ 張世祿(1944)の下編「韻類考」のp.141で、「堆類(原文見出しは「推類」に誤る)」の反切下字として、1例しか現れない「𪛗」を2例としている一方、「𪛗」に相当する字を挙げていないことからすると、張氏も「𪛗」を「𪛗」の異体字と見なしていたと判断できる。

があることからすると、「壻」の本来の反切も「臬惠反」であった可能性がある。

ただし、蟹摂細音は宋代のうちに主母音が狭化して止摂と合流すること、繫伝反切にもその変化の萌芽を反映していると考えられる例が少数存在すること⁷を考えると、反切に誤りを認めず、止蟹合流という変化の萌芽を反映していると解釈することもできる。

2-2a-7 𧄸 盧破反

「𧄸」は『広韻』では「郎果切（果韻来母）」である。これに対し「破」は過韻であり、それぞれ上声と去声と声調が異なっている。

同音の「羸」の反切が「盧跛反」であることからすると、「破」は「跛」の誤りであると考えられる。

2-3a-5 莢 也ヒ反

「莢」は『広韻』では「徐姉切」で旨韻開口邪母の音であるが、大徐本（失ヒ切）および篆韻譜（式視切）では旨韻開口書母。『集韻』には両音を載せるが、書母の音（矧視切）の義注は「説文菜也」、邪母の音（序視切）の義注は「艸名蒿也」であることからすると、説文における音としては書母の方がふさわしいとみられる。これらに対し「也」は以母であるため、反切上字にはふさわしくない。

大徐本等で同音の「菡」の反切が「式ヒ反」であることからすると、「也」は「式」の誤りの可能性がある。ここで小徐本の説解及び反切を見ると、「菜也，從艸矢聲，也ヒ反」が割注形式で書かれていて、「也」が左右に隣り合うようになっている。ここから、反切上字は右に位置する「菜也」の「也」の影響による誤写の可能性が指摘できる。

なお、他の可能性として「也」を「弛」などの誤写と考えることもできよう。ただし繫伝反切では書母や邪母を表す反切上字に「弛」など「也」を要素として持つ字を用いた例は存在しない。

2-3b-2 𧄸 臣居反

「𧄸」は『広韻』では「強魚切（魚韻群母、また「其呂切（語韻群母）」の音もあり）」。これに対し「臣」は常母であり、声母が合わない。

同音字（渠など）の反切が「巨居反」であることからすると、「臣」は「巨」の誤りであり、本来の反切は「巨居反」であると考えられる。

2-3b-4 𧄸 閑旦反

「𧄸」は『広韻』では「侯欄切（欄韻開口匣母）」である。これに対し「旦」は翰韻であり、韻母が合わない。

張世禄(1944)ではこれを「閑袒反」の誤りとするが、この反切についてはあえて誤りと見ず、「蟹摂・山摂一等舌歯音字における主母音の二等韻母音との合流」を反映しているとみることもできる(東ヶ崎 2003, pp.41-42)。この場合、「旦」の主母音 a が、声母と韻尾の前舌性に影響され、前舌母音に変化し、二等韻（刪・山韻）の主母音 a に合流した、とみるのである。

⁷ 紙韻四等明母の音を持つ「𧄸」「𧄸」の反切に、齊韻明母の音（米など）を示すのに用いられる「名洗反」が使われている。「𧄸」については「米」からの類推である可能性があるが、「𧄸」は類推での説明がしにくい。

2-3b-6 蓮 豆居反

「蓮」は『広韻』では「強魚切 (魚韻群母)」。

これに対し「豆」は定母であり、声母が合わない。

同音字 (渠など) の反切が「巨居反」であることからすると、「豆」は「巨」の誤りであり、本来の反切は「巨居反」であると考えられる。

2-10a-3 苞 比交反

「苞」は『広韻』では「布交切 (肴韻幫母)」。「比」も幫母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音の「包」「匄」の反切が「北交反」であること、および繫伝反切においても直音字の反切上字には直音字を用いる傾向があることを考えると、「比交反」も本来は「北交反」であった可能性がある。

2-10b-6 董 符動反

「董」は『広韻』では「多動切 (董韻端母)」。

これに対し「符」は並母である。

これについては同音の反切が現れないため、本来の形を求めるのは困難であるが、端母で繫伝反切の上字に用いられる字画の類似した文字を探すと「得」がある。ここから「符」は「得」の誤りであり、本来の反切は「得動反」であったという推測が成り立つ。

なおこの他にも、反切上字に用いられている例がないが「篤」「等」なども「符」の本来の字の候補となりうるかもしれない。

2-11b-7 芰 臣記反

「芰」は『広韻』では「奇寄切 (寘韻開口三等群母)」。

これに対し「臣」は常母であり、声母が合わない。「蓴」の場合と同様、「臣」は「巨」の誤りであり、本来の反切は「巨記反」であるとみられる。

なお同音字「魑」の反切が「臣寄反 (巨寄反の誤りか)」であること、および大徐本の反切が「奇記切」であることを考えると、「芰」の反切下字「記」も大徐本からの竄入であり、本来は「巨寄反」であった可能性がある。

2-14a-1 牆 賤忘反

「牆」は『広韻』では「在良切 (陽韻開口從母)」。「賤」も從母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字 (牆など) の反切が「賤忘反」であること、および繫伝反切においても拗音字の反切上字には拗音字を用いる傾向があることを考えると、「賤忘反」も本来は「賤忘反」であった可能性が高い。

2-15a-4 菌 嬰殞反

「菌」は『広韻』では「渠殞切 (軫韻合口三等群母、他に「求晚切 (阮韻合口群母)」の音もあり)」。これに対し「嬰」は見母であり、声母の清濁が合わない。

同音の「荳」「箇」の反切が「瞿殞反」であることからすると、「嬰」は「瞿」の誤りであり、本来の反切は「瞿殞反」であると考えられる。

2-16a-7 藁 此眇反

「眇」は諸書に見えない。「眇」の譌字とみられる。

また「藁」は『広韻』では「甫遙切（宵韻四等幫母）」、これに対して「此」は清母であり、声母が合わないが、同音字「覲」の反切が「比眇反」であることからすると、「此」は「比」の誤りであり、本来の反切は「比眇反」であるとみられる。

2-16b-2 英 又平反

「英」は『広韻』では「於驚切（庚韻開口三等影母）」。これに対し「又」は云母であり、声母が合わない。

同音の「秧」の反切が「乙平反」であることからすると、「又」は「乙」の誤りであり、本来の反切は「乙平反」であるとみられる。

2-16b-7 莢 尺俠反

「莢」は『広韻』では「古協切（帖韻見母）」である。これに対し「尺」は昌母であり、声母が合わない。

同音の「頰」「峽」の反切が「居俠反」であることからすると、「尺」は「居」の誤りであり、本来の反切は「居俠反」であると考えられる。

2-17b-1 𪔐 工向反

「𪔐」は『広韻』では「丑亮切（漾韻開口徹母）」。これに対し「工」は見母であり、声母が合わない。

同音字（悵など）の反切が「丑向反」であることからすると、「工」は「丑」の誤りであり、本来の反切は「丑向反」であると考えられる。

2-18b-5 薦 爲焉反

「薦」は『広韻』では「於乾切（仙韻開口三等影母）また「謁言切（元韻開口影母）」の音もあり」。これに対して「爲」は云母であり、声母が合わない。のみならず「焉」も云母であるため「爲焉反」は反切の体を成していない。

大徐本・篆韻譜・集韻等で同音の「馮」⁸の反切が「殷焉反」であることからすると、「焉」は「殷」の誤り（おそらく直後の「焉」の影響による）であり、本来の反切は「殷焉反」であると考えられる。

2-22a-7 藟 閏皆反

「藟(埋)」は『広韻』では「莫皆切（皆韻明母）」。これに対し「閏」は日母であり、声母が合わない。

同音の「藟」の反切が「閏皆反」であることからすると、「閏」は「閏」の誤りであり、本来の反切は「閏皆反」であるとみられる。

⁸ 『広韻』で「馮」は「有乾切（仙韻開口云母）」もしくは「於建切（願韻開口三等影母）」だが、大徐本の音は「乙乾切」で「薦」の「於乾切」と同音、また篆韻譜でも「薦_{於虞反}」の直後に「馮_{水名}」があり同音。『集韻』には4音が見えるが、「説文」の音とするものは仙韻開口三等影母の音（於虔切）のみ。

2-24a-1 茗 雷遼反

「茗」は『広韻』では「徒聊切、(蕭韻定母)」。これに対し「雷(留)」は来母であり、声母が合わない。

同音字(條など)の反切が「笛遼反」であることからすると、「雷」は「笛」の誤りであり、本来の反切は「笛遼反」であると考えられる。

2-24a-7 蒿 治牢反

「蒿」は『広韻』では「呼毛切(豪韻曉母)」。これに対し「治」は澄母であり、声母が合わない。

同音の「薨」の反切が「哈牢反」であることからすると、「治」は「哈」の誤りであり、本来の反切は「哈牢反」であるとみられる。

2-25a-2 菰 古孤反

「菰」(『広韻』なし、『集韻』攻乎切、模韻見母)は「孤」と同音であり、「古孤反」は反切の体を成していない。「孤」は字画の類似した「狐」の誤りの可能性がある。

ただし、同音字の反切は「古乎反(孤など)」もしくは「古呼反(姑など)」であり、「孤」に類した反切下字を用いた例は存在しない。「孤」が「乎」もしくは「呼」の誤りである可能性もあるが、その場合なぜそのような誤写が起こったかの説明が難しい。あるいは説解の「从艸狐聲」の影響か。

2-25b-2 薺 治牢反

「薺」は『広韻』では「呼毛切(豪韻曉母)」。これに対し「治」は澄母であり、声母が合わない。前述の「蒿」と同様、「治」は「哈」の誤りであり、本来の反切は「哈牢反」であるとみられる。

3-2a-4 必 畢聿反

「必」(『広韻』卑吉切、質韻四等幫母)と「畢」は同音であり、「畢聿反」は反切の体を成していない。

同音字(畢など)の反切が「卑聿反」であることからすると、「畢」は「卑(卑)」の誤りであり、本来の反切は「卑聿反」であると考えられる。なお反切校勘記(2)の「澤」(東ヶ崎2009、p.75)も参照されたい。

3-2b-6 半 脯慢反

「半」は『広韻』では「博漫切(換韻幫母)」。これに対し「脯」は非母、「慢」は諫韻であり、反切の示す音と帰字が全く合わない。

同音の「舛」「料」の反切が「哺漫反」であることからすると、「脯」は「哺」の、「慢」は「漫」のそれぞれ誤りであり、本来の反切は「脯慢反」であると考えられる。

3-4a-5 𡗗 旋延反

「𡗗」は『広韻』では「疾縁切(先韻合口從母)」。これに対し「旋」は邪母であり、声母が合わない。しかもこの反切では「𡗗」「旋」「延」はともに先韻となり、反切の体を成さなくなる。

同音の「全」「泉」の反切が「族延反」であることからすると、「旋」は「族」の誤りであ

り、本来の反切は「族延反」であると考えられる。

3-5b-2 𪔐 閑毒反

「𪔐」は『広韻』では「苦沃切（沃韻溪母）」である。これに対して「閑」は匣母であり、声母が合わない。

同音字（酷など）の反切が「闊毒反」であることからすると、「閑」は「闊」の誤りであり、本来の反切は「闊毒反」であると考えられる。

3-10a-1 𪔐 比行反

「𪔐」は『広韻』では「甫盲切（庚韻二等幫母）」。「比」も幫母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音の「𪔐」の反切が「北行反」であることからすると、「苞」の場合と同様に、「比」は「北」の誤りであり、「比行反」も本来は「北行反」であった可能性がある。

3-11a-4 𪔐 但旦反

「𪔐」は『広韻』では「他旦切（翰韻透母）」。「但」は定母であり、声母が合わない。

同音の「𪔐」「炭」の反切が「他旦反」であることからすると、「但」は「他」の誤りであり、本来の反切は「他旦反」であると考えられる。

3-12a-6 𪔐 輒角反

「𪔐」は『広韻』では「竹角切（覺韻知母、また「丁木切（屋韻一等端母）」の音もあり）」。「輒」も知母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（𪔐など）の反切が「輒角反」であることからすると、「輒」は「輒」の誤りであり、「輒角反」も本来は「輒角反」であった可能性がある。

3-13b-1 𪔐 待干反

「𪔐」は『広韻』では「都寒切（寒韻端母、また「市連切（仙韻開口常母）」「常演切（獮韻開口常母）」「時戰切（線韻開口常母）」の3音あり）」である。これに対して「待」は定母であり、声母が合わない。

同音字（丹など）の反切が「得干反」であることからすると、「待」は「得」の誤りであり、本来の反切は「得干反」であると考えられる。張世祿(1944)でも同様に「得干反」の誤りであるとしている。

3-16b-2 𪔐 羽先反

「𪔐」は『広韻』では「雨元切（元韻合口云母）」。「先」は先韻であり、韻母が合わない。

同音字（袁など）の反切が「羽元反」であることからすると、「先」は「元」の誤りであり、本来の反切は「羽元反」であると考えられる。なお反切校勘記(1)の「園」の項(東ヶ崎 2008, p.131)も参照されたい。

3-17b-5 𪔐 他刮反

「𪔐」は『広韻』では「他達切（曷韻透母）」。「刮」は鎋韻であり、韻母が合

わない。同音の「獺」の反切が「他割反」であることからすると、「刮」は「割」の誤りであり、本来の反切は「他割反」であるとみられる。

ただこれも、前述の「覓」のように、「蟹撰・山撰一等舌齒音字における主母音の二等母音との合流」を反映しているとみられる可能性を残している。

4-3a-1 迨 徒閤反

「迨」は『広韻』では「侯閤切（合韻匣母）」。これに対し「徒」は定母であり、声母が合わない。

同音字の多く（合など）の反切が「後閤反」であることからすると、「徒」は「後」の誤りであり、本来の反切は「後閤反」であると考えられる。

4-4a-7 邇 挾蓮反

「邇」は『広韻』では「烏玄切（先韻合口影母）」。これに対し「挾」は匣母であり、声母が合わない。

同音の「贅」の反切が「挾蓮反」であることからすると、「挾」は「抉」の誤りであり、本来の反切は「抉蓮反」であるとみられる。反切校勘記（2）の「淵」の項（東ヶ崎 2009、p.72）も参照されたい。

4-6a-2 逖 王厥反

「逖」は『広韻』で「王伐切（月韻合口云母）」。反切上字の「王」も云母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（越など）の反切が「于厥反」であること、および大徐本の反切が「王伐切」であることからすると、「王」は「于」の誤り（もしくは大徐本からの竄入）であり、本来の反切は「于厥反」である可能性がある。

4-6b-6 逖 顛狄反

「逖」は『広韻』で「都歴切（錫韻端母）」であるが、「逖」も錫韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（滴など）の反切が「顛狄反」であること、また「逖」を反切下字に使った例がこれ以外に見当たらないことからすると、「逖」は「狄」の誤りであり、本来の反切は「顛狄反」であった可能性もある。

4-9a-5 徇 詢順反

「徇(徇)」は『広韻』では「辭閏切（惇韻邪母）」である。これに対し「詢」は心母であり、声母が合わない。『集韻』には惇韻心母相当の音がみえる（須閏切）ので、「詢順反」を誤りとする必要はないのかもしれないが、繁伝反切において惇韻心母の音を表すのに用いられるのは「蘇徇反（浚⁹など）」であり、「詢順反」の例は見えない。

「詢」に字画が類似する邪母字としては「詞」がある。おそらく反切の直前にある徐鍇注「今人作徇」の影響で、「詞」が「詢」に誤写されたのではないだろうか¹⁰。

⁹ 実際の反切は「蘇徇反」だが、「徇」は「徇」の俗字。

¹⁰ 類似の例として、祁寔藻刻本にみえる反切「墟：詞暫反」が、汪啓淑刻本にみえる「詢暫反」の誤りと考えられる（東ヶ崎 2008、p.124）、という例がある。

4-13a-2 跪 馳委反

「跪」は『広韻』では「去委切（紙韻合口三等溪母、また「渠委切（紙韻合口三等群母）」の音もあり）」である。これに対し「馳」は澄母であり、声母が合わない。

「馳」に類似した溪母もしくは群母の字を探すと、溪母字に「驅¹¹」がある。「驅」は繫伝反切の反切上字には現れないが、説文の説解でも「驅：馬馳也」「馳：大驅也」のように互いを説明し合う「互注字」の関係にあり、混同された可能性は少なくない。よって「馳委反」は本来「驅委反」であったという可能性が指摘できる。

4-13b-6 躡 倭儼反

「躡」は『広韻』では「尼輒切（葉韻娘母）」。「倭」は泥母であり、声母が合わない。

泥娘両母が相通していた証拠とみなせる可能性もあるだろうが、同音字の多く（聶など）の反切が「女儼反」であることからすると、「倭」は「女」の誤りであり、本来の反切は「女儼反」であると考えられる。

4-15a-3 躡 澤易反

「躡」は『広韻』では「資昔切（昔韻開口精母）」。「澤」は澄母であり、声母が合わない。

同音字の多く（脊など）の反切が「津易反」であることからすると、「澤」は「津」の誤りであり、本来の反切は「津易反」であると考えられる。

5-5b-4 請 七井反

「請」は『広韻』に「疾盈切（清韻開口從母）」「七静切（静韻開口清母）」「疾政切（勁韻開口從母）」の三音を載せるが、このうち説解の「謁也」に対応する音は「七静切」である¹²。これに対し「井」は清韻または勁韻であり、また繫伝反切では清韻の反切下字として用いられる¹³。「七井反」が帰する音（清韻開口清母）は「請」の音と合わない。

「井」に類似する静韻字を探すと「井」がある。「井」は「郢：以井反」「領：里井反」のように、繫伝反切に用いられた例があり、また「井」と字形が酷似している。このことから、「請」の本来の反切は「七井反」であったと推定できる。なお、「七井反」は大徐本に現れる反切でもあり、小徐本へは竄入した可能性もあるが、同音の反切が現れず比較できないため、あくまで可能性の指摘に止めたい。

5-13a-4 説 奴佳反

「説」は『広韻』では「妳佳切（佳韻開口娘母）」である。これに対して「奴」は泥母であり、声母が合わない。

前述の「躡」の例と同様、泥娘両母の合流を示す例とも考えられるが、「奴」が「女」など

¹¹ 「驅」には「豈俱切（虞韻溪母）」「區遇切（遇韻溪母）」の2音がある。『集韻』を見るに「跪」の音のうち説文の音とされるのは溪母音（苦委切）であることを考え合わせると、繫伝反切の音も紙韻合口三等溪母と一致するものと予想される。

¹² 『集韻』ではこの音にのみ「説文謁也」とある。「謁也」は勁韻音の字積にも現れるが、そこには「説文」の2字はない。大徐本・『篆韻譜』でも「七井反」で静韻。

¹³ 「輕：牽井反」「名：彌井反」など。

の誤りである可能性もある。

5-13b-3 訃 貢聰反

「訃」は『広韻』では「戸公切（東韻一等匣母）」。これに対し「貢」は見母であり、声母が合わない。同音字の多く（洪など）の反切が「員聰反」であることからすると、「貢」は「員」の誤りであり、本来の反切は「員聰反」であると考えられる。

ただ、この反切には大きな問題があり、それは「員」が匣母でなく云母であることである。この問題については反切校勘記（2）の「仝」の項（東ヶ崎 2009、p.62-63）を参照されたい。あるいは「仝」の反切である「賀聰反」がかえって正しく、3例（洪・鴻・堆）がみられる「員聰反」が誤りである可能性もあるか。

5-14a-7 詹 走嗟反

「詹（『広韻』子邪切、麻韻開口三等精母）」は「嗟」の異体字であり、徐鍇注にも「今俗從口，作嗟」とある。よって「詹：走嗟反」という反切は、注音として極めて不適当である。

「嗟」は何らかの字の誤りであることが明白であるが、その本来の字が何であったのかは、同韻で字形の似たものを見いだしがたく、不明であるというほかない。同音字「置」の反切は「走雅反」だが、これも声調が合わない（「雅」は上声馬韻）うえ、「置」が細音であるのに反切の上下字ともに洪音で、導き出される音が鼻字と合わないため、参考にならない。

5-16a-5 諫 田挾反

「諫」は『広韻』では「徒協切（怙韻定母）」。これに対し「挾」も怙韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（牒など）の反切が「田俠反」であることからすると、「挾」は「俠」の誤りであり、本来の反切は「田俠反」である可能性がある。

5-16a-6 該 荷孩反

「該」は『広韻』では「古哀切（哈韻見母）」。これに対し「荷」は匣母であり、声母が合わない。

同音字の多く（垓など）の反切が「苟孩反」であることからすると、「荷」は「苟」の誤りであり、本来の反切は「苟孩反」であると考えられる。

5-19a-5 丞 視澄反

「丞」は『広韻』では「署陵切（蒸韻開口常母、また「常澄切（澄韻開口常母）」の音もあり）」。これに対し「登」は登韻であり、韻母が合わない。蒸韻と登韻は洪細の関係にあるので、反切下字が通用してもおかしくなさそうであるが、実際には「丞：視澄反」以外には現れない¹⁴。

反切校勘記（2）の「能」の項で言及した通り（東ヶ崎 2009、p.69、注 13）、同音の「承」「輦」の反切が「視澄反」であることからすると、「登」は「澄」の誤りであり、本来の反切は「視澄反」であると考えられる。

¹⁴ 他に「恆：胡磨反」があるが、これは「痕朋反」の誤りとみられる。詳しくは反切校勘記（2）の同字の項（東ヶ崎 2009、p.82）を参照。

6-4a-7 斬 居郡反

「斬」は『広韻』で「居焮切（焮韻見母）」。「居焮切」では開合の関係にある焮韻と文韻は反切下字が通用するので、問韻の「郡」が反切下字になることに問題はない。

しかし、「居郡反」は問韻見母字「攢」の音を示すのにも用いられている。同一の反切で違う音節の音を表記している状態はあまり好ましいものではない。繫伝反切では彌韻日母で開口（憊など）と合口（栗など）で同一の「爾件反」という反切を用いている例があるが、これは臻撮・山撮などで、強口蓋化をもたらすA類介音（四等介音）がある場合に合口介音が弱まる、あるいは脱落したのを反映したとみられる例であり（東ヶ崎 2011）、三等C類の音を持つ「斬」と「攢」の場合には当てはまるとは考えにくい。

むしろこれについては、「斬」の同音の「撞」の反切が「己郡反」であること、また大徐本の反切が「居近切」であることから、本来の反切は「己郡反」であり、反切上字の「居」は大徐本からの竄入であると見るべきであろう。

6-4b-2 韜 吉槐反

「韜」は『広韻』で「古濤切（緩韻見母）」である。これに対し「吉」も見母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（琯など）の反切が「古槐反」であること、および繫伝反切においても直音字の反切上字には直音字を用いる傾向があることを考えると、「吉」は「古」の誤りであり、本来の反切は「古槐反」であった可能性がある。

6-5b-4 𩶇 魚綺反

「𩶇」は『広韻』で「魚倚切（紙韻開口三等魚母）」である。これに対し「綺」も紙韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音の「𩶇」「𩶇」の反切が「魚倚反」であること、および大徐本の反切が「魚綺切」であることを考えると、本来の反切は「魚倚反」で、「綺」は大徐本からの竄入、もしくは「倚」の誤写の可能性がある。

6-6b-4 𩶇 閩六反

「𩶇」は『広韻』に「余六切（屋韻三等以母）」の音を載せるが、これは「売る、ひさぐ」の意味であり、本来の「かゆ」の意味では異体字「粥」のもう一つの音として載せる「之六切（屋韻三等章母）」の音が適当である。また『広韻』の「𩶇」義注に「案説文，𩶇本音𩶇，𩶇也」とあることから、説文における本音としては同義字「𩶇（支韻三等明母）」の音が考えられていた（あるいは二徐校訂本以前の説文にこの音が付いていた）ことがわかる。実際『篆韻譜』においては「𩶇」は支韻に並べられ、大徐本でも「武悲切」と、支韻と通用する脂韻三等明母の音を示す反切が付けられている。

繫伝反切の「閩六反」は、反切下字の「六」が屋韻三等相当であり、これは「粥」の音と一致するものの、反切上字が「𩶇」と同じ明母であるため、反切の帰する音がどちらにも一致しないということになる。ここで「粥」の同音字の反切を見ると「祝：職六反」「𩶇：隻逐反」。また「𩶇」の同音字の反切は「𩶇𩶇：美皮反」「𩶇：美支反」だが、脂韻三等明母で多数が「閩之反」を用いている（眉など）。

これらのことからすると、「閩六反」の「六」は「之」の誤りであり、本来の反切は「閩之反」であると考えられる。「閩六反」は、単純な誤写とも考えられるが、「𩶇」の音が「粥」

と一致しないことを訝しんだ後世の人が書き換えた可能性もある¹⁵。

6-14b-7 歺 苟垓反

「歺」は『広韻』では「苦哀切（哈韻溪母）」だが、大序本や『篆韻譜』では「古哀切（哈韻見母）」である。『集韻』では「丘哀切（哈韻溪母）」「柯開切（哈韻見母）」「下改切（海韻匣母）」の3音を載せるが、説文の音として注記があるのは「柯開切」のみ。いずれにせよ、「苟」と「垓」はともに見母であり、「苟垓反」は反切の体を成していない。

同音字の多く（垓など）の反切が「苟垓反」であることからすると、「垓」は「孩」の誤りであり、本来の反切は「苟孩反」であると考えられる。

6-17b-2 敷 甫夫反

「敷」は『広韻』では「芳無切（虞韻敷母）」。これに対し「夫」は非母であるが、繫伝反切では非母と敷母は合流して区別されないため、実際には「敷」と「夫」が同一音となっ
てしまい、反切の体を成していない。

反切校勘記（2）の「庸」と同様（東ヶ崎 2009, p.67）、同音字の多く（孚など）の反切が「甫爰反」であることからすると、「爰」は「夫」の誤りであり、本来の反切は「甫爰反」であると考えられる。

6-18a-5 敎 梨桃反

「敎」は『広韻』では「落蕭切（蕭韻来母）」である。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008, pp.116-117）参照。

6-19a-4 敷 畢聿反

「敷（『広韻』卑吉切、質韻四等幫母）」と「畢」は同音であり、「畢聿反」は反切の体を成していない。

前述「必」の項と同様、「畢」は「卑」の誤りであり、本来の反切は「卑聿反」であると考えられる。反切校勘記（2）の「澤」の項（東ヶ崎 2009, p.75）も参照。

6-20a-2 敷 尺萬反

「敷」は『広韻』で「又万切（願韻合口初母）」または「芳万切（願韻敷母）」。これに対し「尺」は昌母であり、声母が合わない。

「尺」に字面の似た初母もしくは敷母（非母）の字を繫伝反切に用いられる字から探すと、「又」がある。おそらく誤って「又」を「尺」としてしまったのだろう。

なお、「尺萬反」を誤りとせず、正歯音二等と三等の通用例とみなすことも可能かもしれない。ただし願韻のようないわゆる「純三等韻」では、歯音はごくまれに莊組字が現れるのみであり、基本的に章組字は現れない。

7-1b-6 眼 儒盞反

¹⁵ 『校録』にも「小徐蓋以此為粥之正文，故闕六反。大徐武悲切者，蓋以此為米部糜之正文也」とあり、小徐の音を（声母が合わないにもかかわらず）屋韻の音と見なしている。

「眼」は『広韻』では「五限切（産韻開口疑母）」。これに対し「儒」は日母であり、声母が合わない。

「眼」の同音字が現れないため、反切の正しい形を求めることは難しいが、張世禄(1944)で反切を「偶盞反」に訂しているのに従いたい。

7-3b-2 瞽 匹妙反

「瞽」は『広韻』では「撫招切（宵韻四等滂母）」あるいは「敷沼切（小韻四等滂母）」。これに対し「妙」は笑韻であり、声調が合わない。

「敷沼切」と同音の「瞽」の反切が「匹眇反」であることからすると、「妙」は「眇」の誤りであり、本来の反切は「匹眇反」であるようにもみえる。

ただし、「匹眇反」の反切は笑韻四等滂母の音を表すのに使われるものであり（𣎵など）、あるいは「瞽」に去声笑韻の音が付されていたのかもしれない。実際『集韻』には上2つの音以外に「匹妙切」があり、繫伝反切の音と一致する。ただし同書で「説文」の音とされているのは小韻四等滂母音（匹沼切）であり、大徐本や『篆韻譜』の音も同じ「敷沼切(反)」である¹⁶。

7-4b-5 賜 矢易反

「賜」は『広韻』では「施隻切（昔韻開口書母）」。これに対し「矢」も書母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（釋など）の反切が「失易反」であることからすると、「矢」は「失」の誤りであり、本来の反切は「失易反」である可能性がある。

7-5b-7 眈 賜七反

「眈」は『広韻』では「丑栗切（質韻開口徹母）」「陟鎋切（鎋韻開口知母）」「徒結切（屑韻開口定母）」の3音があるが、『説文』の説解「目不正也¹⁷」に合う音は「丑栗切」である。これに対し「賜」は心母であり、声母が合わない。

同音の「扶」の反切が「暢七反」であることからすると、「賜」は「暢」の誤りであり、本来の反切は「暢七反」であるとみられる。

7-6a-3 盲 沔彭反

「盲」は『広韻』では「武庚切（庚韻二等明母）」。これに対し「沔」も明母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（萌など）の反切が「沒彭反」であることからすると、「沔」は「沒」の誤りであり、本来の反切は「沒彭反」であった可能性がある。

7-11b-4 雅 彦思反

「雅」は『広韻』では「五佳切（佳韻開口疑母）」¹⁸。これに対し「思」は之韻であり、韻

¹⁶ 『篆韻譜』十卷本は「符少反（笑韻四等並母相当）」に誤る。五卷本では「敷沼反」と正してある。

¹⁷ 小徐本は「目不從正也」に作るが、「從」は衍字か。

¹⁸ 他に「力軌切（旨韻合口来母）」の音もみえるが、これは「蜚」の異体字としての「雅」であり、本来の「雅」とは別字と見なすべきである。

母が合わない。「雅」の同音字の反切を見ると、「崖」「厓」ともに大徐本と同じ「五佳反」であり、参考にはできない。

「思」に類似の佳韻字を探すと「愍」がある。「愍」は繫伝反切の下字に使われた例が見当たらないものの、他に適当な字も見つからない。おそらく本来の反切は「彦愍反」であろうと推測される。

7-12b-1 雕 覩姚反

「雕」は『広韻』では「都聊切（蕭韻端母）」。「姚」は宵韻であり、韻母がやや合わない。

蕭韻と宵韻は反切系聯法では分かれるものの（張世祿 1944）、実際には通用している例がいくつもあり、すでに合流していた可能性が高い。そのため、この例も問題なしとする見方もできる。しかし一方で、同音字の多く（貂など）の反切が「覩挑反」であることからすると、「姚」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「覩挑反」であるという可能性も低くない。

7-14a-2 奮 方慢反

「奮」は『広韻』では「方問切（問韻非母）」。「慢」は諫韻であり、韻母が合わない。同音字の反切は「羸(糞)」が「方問反（大徐本に同じ）」、「漢」が「夫問反」と全く異なっており、参考とならない。

「奮」と同韻の字で「慢」に似ているものを探すと「慍(愠)」がある。「慍」は他に繫伝反切の下字に使われた例が見当たらないものの、他に適当な字も見つからない。おそらく本来の反切は「方慍反」であろうと推測される。

7-17b-7 𪔐 挾蓮反

「𪔐」は『広韻』では「烏玄切（先韻合口影母）」。「挾」は匣母である。

前述の「逎」と同様、「挾」は「抉」の誤りであり、本来の反切は「抉蓮反」であるとみられる。

7-21b-4 𪔐 蒲特反

「𪔐」は『広韻』では「鳩」に作り「北末切（末韻幫母）」または「蒲撥切（末韻並母）」¹⁹。これに対し「特」は徳韻であり、韻母が合わない。

「特」と類似の字画で曷・末韻の反切下字として用いられる字を探すと「𪔐」がある。「𪔐」は同音字（跋など）の反切（歩𪔐反）に用いられている。これらのことから「特」は「𪔐」の誤りであり、本来の反切は「蒲𪔐反」であるとみられる。なお、上字の「蒲」も、大徐本の反切「蒲達切」からの竄入である可能性がある。

8-9a-4 膏 家豪反

「膏」は『広韻』では「古勞切（豪韻見母、他に「古到切（号韻見母）」の音もあり）」。「豪」も豪韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（高など）の反切が「家豪反」であることからすると、「豪」は「豪」の誤りであり、本来の反切は「家豪反」であった可能性もある。

¹⁹ 大徐本および『篆韻譜』の反切は「蒲達切(反)」で、この字のみ他の同音字（跋など）と異なり、曷韻に入る。

8-12b-1 𤑔 梨桃反

「𤑔」は『広韻』では「落蕭切 (蕭韻来母)」である。これに対し「桃」は豪韻である。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記 (1) の「遼」の項(東ヶ崎 2008, pp.116-117)参照。

8-14a-2 𤑔 殷葉反

「𤑔」は『広韻』では「於嚴切 (嚴韻影母)」「於輒切 (葉韻三等影母)」「於業切 (業韻影母)」。

これに対し「葉」は葉韻であり、反切は「於輒切」の音と一致するため、反切に問題はないようにみえる。

ただ、「於業切」の音を持つ字 (𤑔など) の反切が「殷葉反」であることからすると、「葉」が「業」の誤りであり、本来の反切は「殷葉反」であつたようにもみえる。咸摂三等韻にはわずかながら AB 類 (塩韻) と C 類 (嚴凡韻) の反切下字が通用する例があるため²⁰、「殷葉反」もその例と見ることもできようが、三等 A 類の「葉」を三等 C 類字の反切下字にする例は少ないため、「殷葉反」をそのまま認めるのはいささかためられる²¹。

8-17a-5 𤑔 秋月反

「𤑔」は『広韻』では「初紀切 (止韻初母)」もしくは「初栗切 (質韻初母)」だが、大徐本では「親結切²² (屑韻開口清母)」、『篆韻譜』では「親吉反 (質韻清母)」。

これに対し「月」は月韻であり、韻母が合わない。

「親吉反」の音を持つ字の多く (七など) の反切が「秋日反」であることからすると、「月」は「日」の誤りであり、本来の反切は「秋日反」であると考えられる。

8-19b-3 𤑔 施米反

「𤑔」は『広韻』では「研啓切 (齊韻開口疑母)」あるいは「五稽切 (齊韻開口疑母)」。

これに対し「施」は書母であり、声母が合わない。

下字の「米」から判断すれば繫伝反切の音は「研啓切」に一致するはずだが、この場合「𤑔」の同音字は現れず、反切から類推することはできない。

「施」に字画の類似した疑母字として、敢えて本来の字の候補を探せば、「疑」もしくは「擬」が挙がるだろう。ことに「擬」は「五稽切」に相当する繫伝反切として「擬西反」が多くの字に用いられている (倪など)。以上から、本来の反切は「疑米反」もしくは「擬米反」という推測ができると考えられる。

9-3b-4 𤑔 除諸反

「𤑔 (『広韻』直魚切、魚韻澄母)」「除」「諸」はともに魚韻であり、反切の体を成していない。

同音字の多く (除など) の反切が「陳諸反」であることからすると、「除」は「陳」の誤り

²⁰ 例として「陝など (琰韻)：收儼反 (儼韻)」、「儼广 (儼韻)：牛儼反 (琰韻)」など。

²¹ 『広韻』の反切をみると、反切下字に「葉」を用いているのはむしろ葉韻四等影母であり (𤑔：於葉切)、繫伝反切でも「厭：伊葉反」となっている。一方で大徐本および『篆韻譜』では「於輒切」を葉韻四等影母の反切として用いている。

²² 他の屑韻開口清母字 (切など) の反切が「千結切」であることを考えると、大徐本の「親結切」は「親吉切」の誤りである可能性がある。

であり、本来の反切は「陳諸反」であると考えられる。

9-4a-4 箒 邊彌反

「箒」は『広韻』では「府移切（支韻四等幫母）」「邊兮切（齊韻幫母）」「并弭切（紙韻四等幫母）」。「これに対し「彌」は支韻であり、「邊彌反」は「府移切」と一致するため、反切に問題はないようにみえる。

ただ「并弭切」の音を持つ字（俾など）の反切が「邊弭反」であること、「彌」が反切に用いられる例が「邊彌反」以外にないこと、「府移切」の同音字（寡など）の繫伝反切が「眠伊反」であることからすると、「彌」は「弭」の誤りであり、本来の反切は「邊弭反」であると考えられる。あるいは「彌」は単純な誤写ではなく、「箒」の音が「府移切」の音と一致しないことを不審に思った後世の人が、「弭」を「彌」に書き換えた可能性もあるだろう。

9-4b-6 箒 従本反

「箒」は『広韻』では「徒損切（混韻定母）」。「これに対し「従」は従母であり、声母が合わない。

同音の「庵」の反切が「徒本反」であることからすると、「従」は「徒」の誤りであり、本来の反切は「徒本反」であるとみられる。

9-5b-5 籊 女攝反

「籊」は『広韻』では「尼輒切（葉韻娘母）」、「これに対し「攝」も葉韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く（聶など）の反切が「女懾反」であることからすると、「攝」は「懾」の誤りであり、本来の反切は「女懾反」であると考えられる。

9-7a-1 𦉳 也卓反

「𦉳」は『広韻』では「於角切（覚韻影母）」「於教切（効韻影母）」。「これに対し「也」は以母であり、声母が合わない。

同音字の多く（握など）の反切が「乙卓反」であることからすると、「也」は「乙」の誤りであり、本来の反切は「乙卓反」であると考えられる。

9-7b-6 𦉳 語淹反

「𦉳」は『広韻』では「語輒切（嚴韻疑母）」。「これに対し「淹」は塩韻もしくは梵韻であり、韻母が合わない。

同音字「嚴」の反切が「語醃反」であることからすると、「淹」は「醃」の誤りであり、本来の反切は「語醃反」であるとみられる。

9-11a-5 𦉳 予厥反

「𦉳」は『広韻』では「王伐切（月韻合口云母）」。「これに対し「予」は以母である。繫伝反切では開口で云母と以母（および匣母四等）が合流しているが、合口では云母が独立を保っている（梅 1993, p.24, および東ヶ崎 1999）ため、声母が合わない。

同音字の多く（越など）の反切が「于厥反」であることからすると、「予」は「于」の誤りであり、本来の反切は「于厥反」であると考えられる。前述「述」の項も参照。

9-11a-7 𪛗 側麥反

「𪛗」は『広韻』では「楚革切 (麦韻開口初母)」。

これに対し「側」は莊母であり、声母が合わない。

同音字の多く (策など) の反切が「測麥反」であることからすると、「側」は「測」の誤りであり、本来の反切は「測麥反」であると考えられる。

9-11b-1 𪛗 呼乙反

「𪛗」は『広韻』では「呼骨切 (沒韻合口曉母)」。

これに対し「乙」は質韻であり、韻母が合わない。

同音字の多く (忽など) の反切が「呼兀反」であることからすると、「乙」は「兀」の誤りであり、本来の反切は「呼兀反」であると考えられる。

9-11b-2 𪛗 此貪反

「𪛗」は『広韻』では「七感切 (感韻清母、また「昨鹽切 (塩韻從母)」の音もあり)」。

これに対し「貪」は覃韻であり、韻母が合わない。

同音字「慘」「慘」の反切が「此噴反」であることからすると、「貪」は「噴」の誤りであり、本来の反切は「此噴反」であると考えられる。

9-13b-5 𪛗 予厥反

「𪛗」は『広韻』では「王伐切 (月韻合口云母)」。

これに対し「予」は以母である。前述の「曰」と同様、「予」は「于」の誤りであり、本来の反切は「于厥反」であると考えられる。四庫全書本で「子厥反」となっているのも傍証となろう。

9-17a-4 𪛗 候抱反

「𪛗」は『広韻』では「胡老切 (皓韻匣母)」。

これに対し「抱」は豪韻であり、声調が合わない。

同音字の多く (顚など) の反切が「候抱反」であることからすると、「抱」は「抱」の誤りであり、本来の反切は「候抱反」であると考えられる。

9-21b-1 𪛗 相室反

「𪛗」は『広韻』では「辛聿切 (術韻心母)」。

これに対し「室」は質韻である。術韻は質韻の合口韻母の一部を分立させたものであり、繫伝反切においては反切下字が通用し合うため、「𪛗」の韻母を「室」で表すことに問題はない。しかしこの反切では、「相」にも「室」にも合口要素が存在しないため、反切から導き出される音が「𪛗」と一致しないのが問題となる。

繫伝反切には臻摂・山摂などでA類介音がある場合に合口介音が弱まる、あるいは脱落したのを反映したとみられる反切が存在し (東ヶ崎 2011)、「相室反」もその1つと見ることができよう。しかし、同音字 (戌など) の反切が「相聿反」であることからすると、むしろ「室」は「聿」の誤りであり、本来の反切は「相聿反」であるとみるべきである。

10-4b-5 𪛗 慈例反

「𪛗 (飼)」は『広韻』では「祥吏切 (志韻邪母)」。

これに対し「例」は祭韻であり、韻母が

合わない²³。

蟹摂細音は宋代以降止摂と合流するため、これをその反映と見ることもできる。しかし、同音字「字」「芋」の反切が「慈伺反」であることからすると、「例」は「伺」の誤りであり、本来の反切は「慈伺反」である可能性も高い。

10-5a-2 饒 庶根反

「饒」は『広韻』には「式羊切（陽韻開口書母）」「書兩切（養韻開口書母）」「式亮切（漾韻開口書母）」の3音を載せる。さらに大徐本・『篆韻譜』の音はこれらと一致しない「人漾切（漾韻開口日母）」。

以上に対し「根」は庚韻二等であり、韻母が合わない。「式羊切」と一致する反切として「償：庶張反²⁴」が現れる。このことからすると、「根」は「張」の誤りであり、本来の反切は「庶張反」であるとみられる。

10-7b-2 内 能未反

「内」は『広韻』では「奴對切（隊韻泥母）」。

これに対し「未」は未韻であり、韻母が合わない。この反切については2つの解釈ができる。1つは蟹摂一等合口と止摂合口との合流の反映と見るもので、王力(1982)はこの立場である。ただしこの合流を示している反切はこれのみとなる²⁵。

もう1つは「未」がなんらかの字の誤りであるとするものである。この場合、繫伝反切で常用される「妹」が有力な候補となる。このとき本来の反切は「能妹反」と推定される。この他に「昧」なども反切下字の候補となりうるであろう。

11-6a-5 梢 羶巢反

「梢」は『広韻』では「所交切（肴韻生母）」。

これに対し「羶」は章母であり、声母が合わない。同音字（捎など）の反切が「羶巢反」であることからすると、「羶」は「羶」の誤りであり、本来の反切は「羶巢反」であると考えられる。ただ「羶」は書母であり、これが正しいとしてもやはり反切に問題は残る。繫伝反切においては体系的とは言えないが、章組と莊組の間の声母混用が一定数みられ、これらの発音が近似していたと推測される。

11-12a-6 櫛 于离反

「櫛」は『広韻』では「於離切（支韻三等開口影母）」。

これに対し「于」は云母であり、

²³ この反切にはもう1つ、上字の「慈」が從母であるという問題がある。繫伝反切の音体系では、船母と常母は混同が進んでいるが、從母と邪母は一部混同があるものの区別されている。志韻でも從母字「字：慈伺反」に対して邪母字「寺：辭伺反」「嗣：辭筭反」と区別があり、混同を示すのは「飢」のみ。これについては個別的な変化であると見るべきだろう。

²⁴ 「償」は『広韻』で「市羊切（陽韻開口常母）」もしくは「時亮切（漾韻開口常母）」、また大徐本でも「食章切（陽韻開口船母）」である。繫伝反切の「庶張反（陽韻開口書母相当）」が何によるものかは不明。なお陽韻開口書母（商など）に常用される繫伝反切は「式陽反」である。

²⁵ 他に王力(1982)には「罪：造洧反」「鉞：莫迫反」が蟹摂一等合口と止摂合口の合流を示す例として挙げられているが、これらはそれぞれ「造灌反（あるいは造璫反）」「莫堆反」の誤りとみられるため（それぞれ東ヶ崎 2009, p.62, p.85 を参照）、合流例とはならない。

声母が合わない。

前述の通り繫伝反切では、本来「於」であるべき箇所が「于」となっている例が多数現れ、これらは文中の「於」を伝写の段階で「于」に書き換えたことによる誤りであるとみられるが、これもその1つと考えられうるものである²⁶。王力(1982)でも反切を「於離反」と訂している。

ただ、同音字の多く(椅など)の反切が「於奇反」であること、および大徐本の反切が「於離切」であることからすると、本来「櫛」の反切自体が大徐本からの竄入である可能性も高い。同様に「椅」も「於離反」の反切を持つが、これも大徐本からの竄入とみられる²⁷。

11-12b-7 櫛 于岳反

「櫛」は『広韻』には「薄胡切(模韻並母)」「蒲木切(屋韻一等並母)」「博木切(屋韻一等幫母)」「匹角切(覺韻滂母)」の4音があり、このうち『説文』の説解「木素也」に対応する音は「匹角切」である。これに対し「于」は云母であり、声母が合わない。

同音字の反切を見ると「朴：坡岳反」「璞：披岳反」であり、本来の反切はこれらのうちのどちらかであろう。「于」は「坡」もしくは「披」の残画の変化したものか。

11-13a-6 柴 士佳反

「柴」は『広韻』では「士佳切(佳韻開口崇母)」。

これに対し「佳」は脂韻であり、韻母が合わない。
同音字「紫」の反切が「士佳反」であることからすると、「佳」は「佳」の誤りであり、本来の反切は「士佳反」であるとみられる。

11-15a-3 櫛 于斬反

「櫛」は『広韻』では「於斬切(焮韻影母)」。

これに対し「于」は云母であり、声母が合わない。
前述の通り繫伝反切では本来「於」であるべき箇所が「于」となっている例が多数現れること、また同音字「憲」の反切が「於斬反」であることからすると、「于」は「於」の誤りであり、本来の反切は「於斬反」であると考えられる。

11-16b-7 槍 褚常反

「槍」は『広韻』では「七羊切(陽韻開口清母、また「楚庚切(庚韻二等開口初母)」の音もあり)。

これに対し「褚」は知母もしくは徹母であり、声母が合わない。
同音字「蹠」「槍」の反切が「猜常反」であることからすると、「褚」は「猜」の誤りであり、本来の反切は「猜常反」であるとみられる。なお同音には他に「膾：清常反」「斨：倩常

²⁶ 「於」と「于」の伝本間での不一致が現れるのは卷十三以降であるが、諸本で一致して「于」でありながら、同音字の反切等から「於」の誤りと見なしうる例が現れるのは卷十一からである。これは「於→于」への書き換えの後で、その誤りをのちに正した人が、卷十一に関しては見落としてしまった、ということであろうか。

²⁷ 「椅」は大徐本で「櫛」と「梓」の間に位置するが、小徐本では「枳」と「楓」の間に位置する。説解の「梓也」からすれば、大徐本の方の並びが本来のものであり、小徐本は本来この字を欠いていたものを後世の人が書き足した(そのときに位置を誤った)ものと推測できる。なお『篆韻譜』は十卷本・五卷本ともに「椅」「櫛」を欠くが、このことも本来この2字が小徐本になく、後世の人が大徐本から補ったという推定の傍証になりえよう。

反」があり、これら「清」「倩」が本来の反切上字である可能性もある。

11-18b-3 茱 牙瓜反

「茱」は『広韻』で「鋸(鏹鈐)」に作り「戸花切(麻韻合口匣母)」。これに対し「牙」は疑母であり、声母が合わない。

反切校勘記(1)、「樛」の項(東ヶ崎 2008、p.128、注 24)で述べた通り、「牙」は「互」の俗字「𠂔」の誤りであるとみられ、本来の反切は「互瓜反」であると考えられる。

11-20b-6 橫 胡晃反

「橫」は『広韻』で「胡廣切(蕩韻合口匣母)」だが、これと反切下字の「晃」は同音であり、反切の体を成していない。

同音の「眇」「撫」の反切が「胡莽反」であることからすると、「晃」は「莽」の誤りであり、本来の反切は「胡莽反」であると考えられる。

11-22a-3 梯 他帝反

「梯」は『広韻』では「土雞切(齊韻開口透母)」。これに対し「帝」は霽韻であり、声調が合わない。

同音字「鵬」の反切が「他嗔反(嗔は啼の異体字)」であることからすると、「帝」は「啼」の誤りであり、本来の反切は「他啼反」であると考えられる。

11-23a-5 𣎵 于靳反

「𣎵」は『広韻』では「𣎵」に作り「於謹切(隱韻影母)」。これに対し「于」は云母、「靳」は焮韻であり、声母と声調が合わない。

声母については、前述の通り繫伝反切では本来「於」であるべき箇所が「于」に書き換えられたためとみられる。また韻母が焮韻であるのは「𣎵」との字の混同があった可能性がある。実際『集韻』では「𣎵」が「𣎵」の異体字として扱われており、隱韻音(倚謹切)の義注には「棟也」、焮韻音(於靳切)の義注には「説文焚也(「𣎵」の説解)」とあり、『広韻』にはあった「𣎵」の「説文𣎵也」に相当する義注はどこにも見えない。

11-24b-3 𣎵 比鬼反

「𣎵」は『広韻』では「邊兮切(齊韻幫母、また「傍禮切(齊韻並母)」の音もあり)」。これに対し「鬼」は尾韻であり、韻母が合わない。

同音字「陸」の反切が「比倪反」であることからすると、「鬼」は「倪」の誤りであり、本来の反切は「比倪反」であると考えられる。

11-27a-6 橫 戸更反

「橫」は『広韻』には「戸盲切(庚韻合口匣母)」「戸孟切(映韻合口匣母)」「古黄切(唐韻合口見母)」の3音を載せる。このうち「戸盲切」の義注は「縦横」、「戸孟切」は「非理来」、「古黄切」は「長安門名」。『説文』での意味「闌木」に一致するのは、『集韻』や大徐本を見るに「戸盲切」の音である。

繫伝反切の「戸更反」が示す音は「戸孟切」に一致し、またこの反切は「潢」の音を示すのにも用いられている。一方、「戸盲切」に一致する繫伝反切には「𣎵：戸庚反」がある。意味の一致を重視すれば「更」は「庚」の誤りということになり、逆に「戸更反」の字面を重

視すれば、小徐本では通例と違う音を説文音として採用したことになる。いずれが正しいかは後考を待ちたい。

11-28b-7 柅 都亘反

「亘(互)」は「柅(『広韻』は「亘」のみ載せ、古鄧切、嶸韻開口見母)」の重文(古文)であり、「柅：都亘反」は反切の体を成していない。しかも、反切上字の「都」も端母であって「柅」とは全く一致しない。

本来の反切については、同一音の反切もなく、他に手がかりとなるものもほとんどないため、不明としか言いようがない。極端な話、全く間違った反切が付けられた可能性すらある。張世祿(1944)では「古鄧反」に訂しているが、これは『広韻』や大徐本の反切と同じであり、従えない。

どのような推測も想像の域を出ないが、敢えて想像を逞しくすれば、反切の上下が顛倒していて、「都」は「鄧」の誤り、「亘」は例えば「良」あるいは「己」などの変化した形である可能性がある。

11-29a-2 杵 穀紐反

「杵」は『広韻』では「敕久切(有韻徹母)」。これに対し「穀」は見母であり、声母が合わない。

同音字「丑」の反切が「敕紐反」であることからすると、「穀」は「敕」の誤りであり、本来の反切は「敕紐反」であるとみられる。

12-3b-2 南 叔甘反

「南」は『広韻』では「那合切(覃韻泥母)」。これに対し「叔」は書母であり、声母が合わない。同音字「男」の繫伝反切は「年覃反」であり比較対象にならない。

張世祿(1944)は「奴甘反」の誤りとする。これに従うべきであろう。

12-6a-4 卑 碧劒反

「卑」は『広韻』では「卑」に作り「方斂切(琰韻幫母)」。これに対し「劒」は梵韻であり、韻母が合わない。同音字「貶」の繫伝反切は「悲儉反」であり比較対象にならない。

「劒」に似た琰韻字を繫伝反切の下字から探すと、「斂」がある。おそらく「劒」は「斂」の誤りであり、「碧劒反」はおそらく「碧斂反」の誤りと推測される。

12-9b-3 貝 補每反

「貝」は『広韻』では「博蓋切(泰韻幫母)」。これに対し「每」は賄韻であり、韻母が合わない。同音字の反切は「秣謁：補會反」であり²⁸、比較対象にならない。

「每」と類似の字を、泰韻もしくはこれと通用する隊韻・代韻の繫伝反切下字から探すと、隊韻字「悔」がある。おそらく「每」は「悔」の誤りであり、本来の反切は「補悔反」であったと推測される。

12-12b-5 賃 女心反

「賃」は『広韻』では「乃禁切(沁韻娘母)」。これに対し「心」は侵韻であり、韻母が合

²⁸ この他に「郝：博梅反(後述)」と「鯀：浦會反(補會反の誤りか)」がある。

わない。

同音字が現れないため、「心」の類似の字を繫伝反切の下字として使用される沁韻字から探すと、「沁」がある。おそらく「心」は「沁」の誤りであり、本来の反切は「女沁反」であったと推測される。

12-17b-2 鄮 呂幺反

「鄮」は『広韻』では「苦幺切（蕭韻溪母）」。「これに対し「呂」は来母であり、声母が合わない。

同音であった可能性の高い「類（宵韻四等溪母²⁹）」の反切が「口幺反」であることからすると、「呂」は「口」の誤りであり、本来の反切は「口幺反」であるとみられる。

なお、この他の可能性として、「鄮」に『集韻』で「堅堯切（蕭韻見母）」の音があることから、「呂」を「莒」の誤りとして、本来の反切が「莒幺反」であったと考えることもできる。ただし同音字（梟など）の反切が「堅蕭反」であること、また繫伝反切で「莒」が反切上字に使われた例がないことからすると、この可能性は低いと言わざるを得ない。

12-19b-1 邨 博梅反

「邨」は『広韻』では「博蓋切（泰韻幫母）」。「これに対し「梅」は咍韻であり、韻母が合わない。同音字の反切は「貝：補梅反（もと補每反に作る）」「𣎵：補會反」であり、比較対象にならない。

「梅」と類似の字を、泰韻もしくはこれと通用する隊韻・代韻の繫伝反切下字から探すと、隊韻字「悔」がある。おそらく「梅」は「悔」の誤りであり、本来の反切は「博悔反」であったと推測される。

12-22a-2 郭 歩勿反

「郭」は『広韻』では「蒲沒切（沒韻並母）」。「これに対し「勿」は物韻であり、韻母が合わない。

沒韻と物韻は臻摂内で洪細の関係となるので反切下字が通用した可能性もあるが、そのような例はこの反切以外にはない。むしろ「勿」が、繫伝反切で沒韻を表すのに用いられる「忽」を誤った字である可能性の方が高いと考えられる。この場合、本来の反切は「歩忽反」であったと推測される。

12-22b-1 鄮 澄沆反

「鄮」は『広韻』では「鄮」に作り「多朗切（蕩韻開口端母）」。「これに対し「澄」は澄母であり、声母が合わない。

同音字「黨」の反切が「登沆反」であることからすると、「澄」は「登」の誤りであり、本来の反切は「登沆反」であるとみられる。

12-22b-3 邨 鹿孫反

「邨(村)」は『広韻』では「此尊切（魂韻清母）³⁰」。「これに対し「鹿」は来母であり、声母

²⁹ 反切校勘記（2）の注4（東ヶ崎 2009, p.60）でも触れたように、張世祿(1944)では繫伝反切の体系において効摂四等韻と三等韻は各々独立しているとされるが、実際には「鵠：令昭反」「杓：片幺反」のように、少数ながら反切下字の通用がみられる。

³⁰ 「邨」自体の『広韻』の音として明示されるのは実際には「徒渾切（魂韻定母）」のみだ

が合わない。

比較すべき同音字もないため、繫伝反切の上字として用いられる、「鹿」に字画が類似している清母字を探すと、「麤(麤)」がある。ことに「麤」は「麤」の俗字であるが、「鹿」と酷似しており、また繫伝反切でも「麤：麤最反」のように実際にこの字形を用いているものもある。これらのことから、「鹿」は「麤」の誤りであり、本来の反切は「麤孫反」であったと推測される。

13-2b-2 𪛗 元帖反

「𪛗」は『広韻』では「𪛗」に作り「筠輒切(葉韻云母、他に「爲立切(緝韻云母)」の音もあり)」。これに対し「元」は疑母であり、声母が合わない。

同音字「𪛗」の反切が「尤帖反」であることからすると、「元」は「尤」の誤りであり、本来の反切は「尤帖反」であるとみられる。

13-4b-2 𪛗 忻沂反

「𪛗」は『広韻』では「香衣切(微韻開口曉母)」。これに対し「沂」も微韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く(稀など)の反切が「忻沂反」であることからすると、「沂」は「祈」の誤りであり、本来の反切は「忻祈反」である可能性がある。

13-7a-6 旋 推治反

「旋」は『広韻』では「似宣切(仙韻合口邪母、また「辞戀切(線韻合口邪母)」の音もあり)」。これに対し「推」は昌母であり、声母が合わない。

同音字「𪛗」「𪛗」の反切が「邪治反」であることからすると、「推」は「邪」の誤りであり³¹、本来の反切は「邪治反」であるとみられる。

13-9a-6 𪛗 勒浪反

「𪛗(『広韻』盧黨切、蕩韻開口来母)」と「勒」「浪」はすべて来母であり、「勒浪反」は反切の体を成していない。

「浪」と字画に類似点のある、繫伝反切の下字に用いられる蕩韻字を探すと「沆」がある。ここから「浪」は「沆」の誤りであり、本来の反切は「勒沆反」であったのではないかという推測が成り立つ。なお同音字の反切「𪛗：勒莽反」からすると、さらに「勒沆反」は「勒莽反」の誤りという可能性もあるが、「莽」と「浪」「沆」は字画に隔たりが大きく、誤写されたとは考えにくい。

13-20b-4 𪛗 竝止反

「𪛗」は『広韻』では「卑履切(旨韻四等幫母)」。これに対し「竝」は並母であり、声母が合わない。

同音字の多く(比など)の反切が「并止反」であることからすると、「竝」は「并」の誤り

が、義注に「亦音村」とあり、「村」と同じ音(すなわち清母音)があることが示唆されている。大徐本や『篆韻譜』の反切もこれに同じ。『集韻』でも説文の音とするのは清母音(麤尊切)である。

³¹ ただ直接「邪」が「推」に誤写されるとは考えにくく、おそらく「邪>雅>推」のように誤写を繰り返したのではないかと推測される。

であり、本来の反切は「并止反」であると考えられる。

13-20b-7 𠂔 白良反

「𠂔」は『広韻』では「歩光切 (唐韻並母)」だが、『集韻』には更に「蒲庚切 (庚韻二等並母)」の音もあり、大徐本や『篆韻譜』のこの音を採用している。

「白良反」の示す音は『広韻』の音に一致するが、この音を表す繫伝反切は「傍勝：薄荒反」「旁：薄茫反」「𠂔：薄皇反」であり、「白良反」を用いている字はない。一方、大徐本等の音にあたる繫伝反切は「彭助𠂔：白亨反」「𠂔：白享反」。これらのことからすると、本来の反切は「白享反」であり、「良」は反切の音が『広韻』などと一致しないことを不審に思った後世の人が「亨」を書き換えたもの、と考えられる。

13-22b-1 科 若何反

「科」は『広韻』では「苦禾切 (戈韻溪母、また「苦臥切 (過韻溪母)」の音もあり)」。これに対し「若」は日母であり、声母が合わない。

同音字「邁」の反切が「苦何反」であることからすると、「若」は「苦」の誤りであり、本来の反切は「苦何反」であるとみられる。

13-26b-2 𠂔 呼委反

「𠂔」は『広韻』では「許委切 (紙韻合口三等曉母)」。

これに対し「呼」も曉母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字の多く (𠂔など) の反切が「吁委反」であることからすると、「呼」は「吁」の誤りであり、本来の反切は「吁委反」である可能性がある。

(未了、(4)へ続く)

参考文献

- 梅 広 (1963) 「説文繫伝反切的研究」 国立台湾大学中国文学系碩士論文
- 東ヶ崎祐一 (1999) 「繫伝反切における匣母、云母、喻母」 『東北大学言語学論集』 第 8 号、東北大学言語学研究会、pp.35-52
- (2003) 「『説文解字繫伝』にみられる反切下字混用——梗摄入声と曾摄入声、および外転一等韻と二等韻の間の——」 『中国語学』 250 号、pp.32-49
- (2008) 「『説文解字繫伝』反切校勘記 (1) —三本異同考・上—」 『東北大学言語学論集』 第 17 号、東北大学言語学研究会、pp.111-137
- (2009) 「『説文解字繫伝』反切校勘記 (2) —三本異同考・下—」 『東北大学言語学論集』 第 18 号、東北大学言語学研究会、pp.59-88
- (2011) 「漢字音における円唇性をめぐって」 『日本學研究』 地平斗 再照明 (李淑子 編、2011.1.14) J&C、韓国、pp.115-140
- 王 力 (1982) 「朱韜反切考」 『王力文集』 第 18 卷 (山東教育出版社 1991)、pp.199-245
- 張 世祿 (1944) 「朱韜反切考」 『説文月刊』 第 2 号、pp.117-171

(韓国 慶熙大学校 外国語大学日本語学科 助教授)
ytougasaki@yahoo.co.jp